

祖師野八幡宮所蔵大般若経奥書調査概報

新井 浩文

はじめに

筆者は、昨年度に安保清和氏所蔵『安保文書』の調査を実施し、安保文書の写本として極めて重要な位置を占める文書群の全容を紹介した。その成果により、従来報告されなかった新出史料を含め、中世武藏武士安保氏の動向を伝える文書群の系譜について検討を加えることができた。^①引き続き今年度は、岐阜県の祖師野八幡宮に伝存する安保氏一門が書写して奉納した安保氏の信仰関係資料である「祖師野八幡宮所蔵大般若経奥書」(岐阜県指定文化財。以下、「奥書」と略す)について調査を行った。^②

祖師野八幡宮は、岐阜県下呂市金山町祖師野に所在する神社で、創立は養和元年(一一八一)に鎌倉鶴岡八幡宮を勧請したのが始まりと伝える。往古は、飛騨四・美濃一六の計二〇か村の惣社であり、鳥居脇と境内の大杉が古社としての歴史を伝えている【写真1・2】。

同社の社殿(県指定文化財)は応永二年(一四一五)の創建で、「奥書」のほか、鎌倉時代作の狛犬(県指定文化財)や文保二年(一三一一八)の裏書がある十六善神図(町指定文化財)、平安時代作とされる十一面観音(町指定文化財)等、文化財の宝庫としても知られている。



【写真1】祖師野八幡宮拝殿と本殿



【写真2】鳥居脇の大杉

「奥書」については、既に『岐阜県史』や『金山町誌』、さらに埼玉県内の自治体史では『新編埼玉県史』や『上里町史』等で一部が紹介されているが、その全体像や成立背景についての言及はこれまで成されていない。本報告では、今回行った調査結果に基づき、この点についても言及できればと考えている。

一 祖師野八幡宮所蔵大般若經奥書について

調査は、祖師野八幡宮が毎年実施している大般若經の虫干し行事が行われた二〇一二年八月二十六日(土)に行った。大般若經六〇〇巻は、四箱の経箱内に分けて社殿脇にある土蔵に納められていた。なお、このうち経箱二つの蓋裏には「八幡宮経箱 永享六年^(二四三四) 箱勸進 沙門友政」の墨書銘が確認される【写真3】。虫干し作業は、宮司以下、氏子の方々によって行われ、それぞれ分担して手際よく風入れと防虫剤の交換を行っていた。こうした地道な伝統行事によって貴重な文化財が脈々と長い間守られてきたことを改めて認識させられた。【写真4】



【写真3】 経箱蓋裏の墨書銘



【写真4】 虫干しの様子

大般若經の状態は、装幀が完全なものから表紙が外れたもの、奥書のみのもとの様々な状態であった。調査は、その中から限られた時間内で奥書が確認できたものについてのみ実施した。

各帖の体裁は折本で、一行一七字詰め。寸法は各帖によって多少の相違はあるが、概ね縦二五・五cm、横九・四cm、一紙の寸法は縦二五・四cm、横四五・〇cmである。

なお、今回の調査では六三本の奥書を確認した。その結果について以前の自治体史等の調査結果と比較して一覽にしたのが【表】である。

二 奥書の背景について

(1) 書写の時期と書写者・場所について

次に、奥書の書写時期と書写者について【表】から確認しておきたい。「奥書」から、少なくとも文保二年(一一三一八)から暦応元年【建武五年】(一一三三八)までの二二年間にかけて書写が続けられたことが確認できる⁵⁾。なお、その時期と書写者は概ね以下の六段階に分類される。

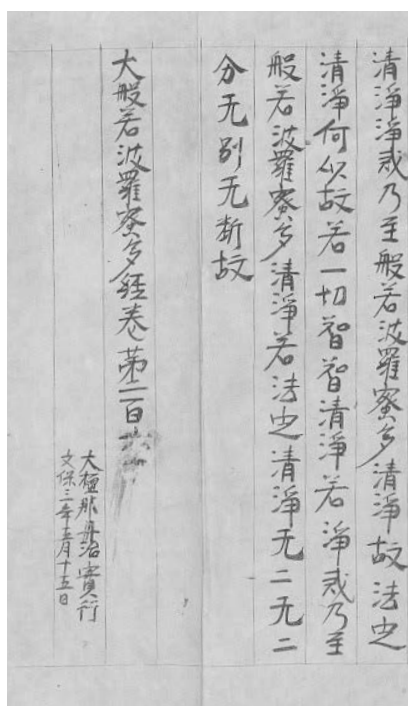
①文保二年四月〜同三年五月 【執筆者】覚西

【檀那】丹治実行

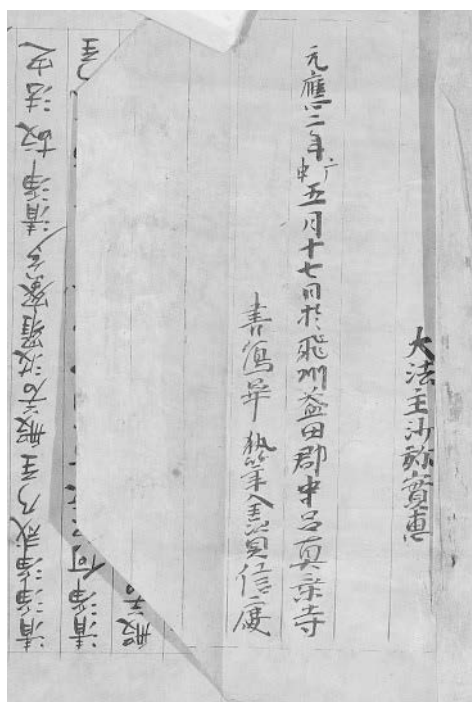
【場所】播磨法花山中院

最も古い年記であることから、この時期に書写が開始されたと考えられる。檀那は安保氏の丹治実行である。なお、祖師野八幡宮所蔵「十六善神像」の裏書には、「右般若經並十六善神之願主 播州法花院覚西法師金資 飛州益田郡真乘寺 于時文保二戊午歲林鐘二十四日 供養之者也 花山院御宇將軍源守国(邦) 親王之祈願所也」との墨書銘があり、大般若經が「同凶」とともに文保二年六月二十四日に真乘

寺に納められたことが確認される。また奥書から執筆者は、播磨国法
 花山中院の覚西であることが知られる。法花山は、現在の兵庫県加西
 市にある天台宗寺院一乗寺のことで、この地が安保氏の所領である播
 磨国須富庄内にあることから、同地で本帖の写経を行い、後に真乗寺
 に奉納されたのであろう。覚西の詳細は不明だが、第二六〇巻の奥書
 には大檀那丹治（安保）実行と文保三年五月十五日の墨書がある【写
 真5】。よって、大般若経奉納は丹治（安保）実行が大檀那となって
 覚西に書写を依頼したことがわかることから、安保氏と特別な関係に
 あった僧と考えられる。真乗寺については後述を参照されたい。なお、
 本巻には、【写真5-1-2】に見るように奥書部分の裏側天地逆部分に
 元応二年五月十七日書写の裏書が見られる。これは、次の②の時期に
 書写された際に書かれたものであろう。今回、確認されたのは本巻の
 みであるが、他巻でも同様な形で書写記録が書かれているものがある
 可能性もある。



【写真5】第二六〇巻奥書部分



【写真5-2】第二六〇巻奥書部分の裏書

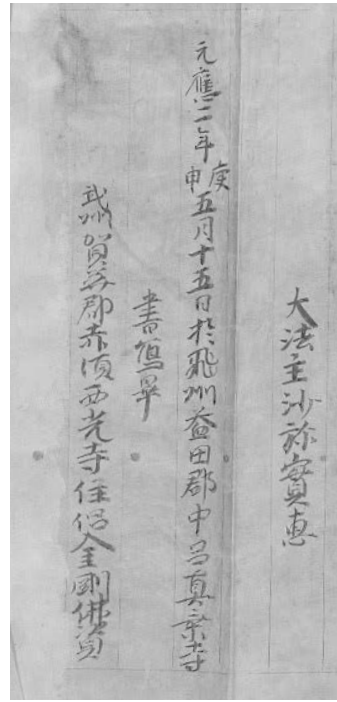
②元応二年（一三二〇）五月

【執筆】実恵・信慶

【場所】飛騨中呂真乗寺

奥書から、執筆者は実恵と信慶が中呂真乗寺で書写を行ったことが
 わかる。実恵については、前掲①に見られた丹治実行とする説がある。
 また、信慶については、後述する。書写場所の真乗寺については不明
 な部分が多いが、先の「十六善神像」裏書から当時真乗寺が鎌倉幕府
 九代である源守邦親王の祈願所であったことが知られる。守邦親王は
 幕府衰退期の中で最後の將軍となり、約二五年間在任した後、元弘三
 年（一三三二）に鎌倉で没している。なお、『禅昌寺史』では、真乗
 寺はその後、宗派を変えて岐阜県下呂市桜洞の禅宗円通寺に移行、さ
 らに現在の岐阜県下呂市中呂にある戦国期に開山された禅昌寺になっ
 たと推定している。

なお、第二二六卷【写真6】には「武州賀美郡赤須西光寺住僧金剛
仏資」の記載があり、安保氏の本領地である。武州賀美郡赤洲（現児
玉郡上里町長浜）の西光寺住僧が実恵のために書写したことがわかる。
当地と安保氏本領地との直接的な関係が知られる史料である⁸⁾。



【写真6】第二二六卷奥書部分

③元亨二年（一二三二）七月〜同三年十一月

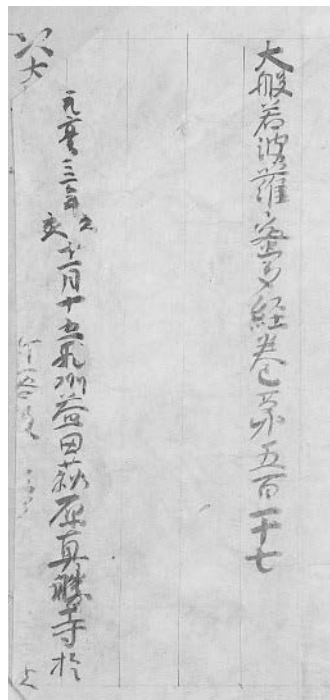
【執筆】 信慶

【場所】 飛驒中呂真乘寺

飛驒萩原真勝寺

執筆者の信慶は、後述する⑤の嘉暦二年九月に真勝寺護摩所で執筆
しており、その際に年齢を七八歳と記していることから、実恵らの師
であろうか。両者の関係は不詳であるが、書写場所が真乘寺であるこ
とから何らかの関係はあったのだろう。なお、書写場所は中呂真乘寺
のほか新たに萩原真勝寺が見られる（第五一七卷）【写真7】。真勝寺
は、下呂市萩原にある諏訪神社【写真10】の別当寺で、現存はしてい

ないが、現在のJ R高山線飛驒萩原駅付近一帯の河岸段丘上にあつた
という⁹⁾【写真11】。

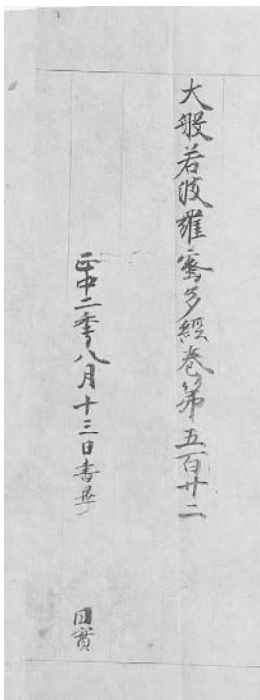


【写真7】第五一七卷奥書部分

④正中二年（一二三五）八月〜九月

【執筆】 圓実

執筆者の圓実については不詳。書写場所についても記載が無く不詳
である【写真8】。これまでの書写者と異なることから、安保氏関係
者以外による書写記録と思われる。



【写真8】第五二二卷奥書

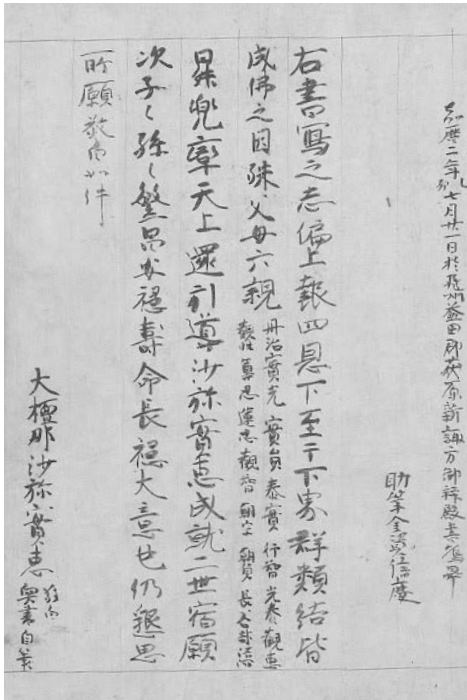
⑤嘉暦二年（一三二七）四月（孟夏）～同年九月

【執筆】実恵・信慶

【場所】飛騨萩原新諏訪拝殿・檀所

飛騨国益田真勝寺護摩所

執筆者は、実恵のほか助筆者として信慶のものも見られる。また、信慶自身も九月に真勝寺の護摩所で執筆している。九月執筆の信慶筆一帖を除く四月～七月の奥書すべてに願文が記され、若干人名の異動があるが「丹治実光・実員・泰実・行智・光泰・蓮信・観恵・観性・尊忍・蓮忍・観智・朝宗・朝員・法阿」等の人名が列挙されている【写真9】。書写場所は、真勝寺のほか、その本社である新諏訪神社の拝殿や檀所でも行われたことが知られる。



【写真9】第五七五巻奥書部分

祖師野八幡宮所蔵大般若経奥書調査概報（新井）



【写真10】諏訪神社



【写真11】桜洞城跡付近から駅方面を望む

⑥建武四年（一三三七）四月～同五年九月

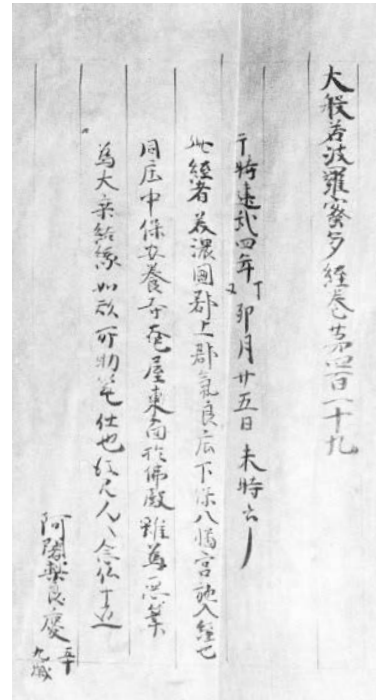
【執筆】良慶

【檀那】宇多良光行

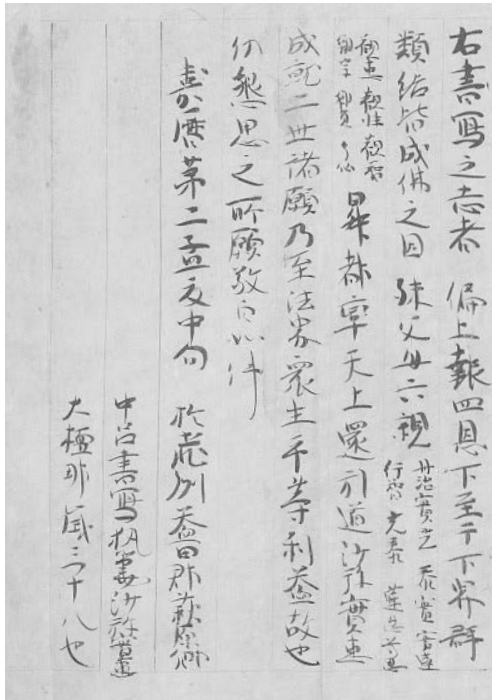
【場所】美濃氣良庄下保

観音寺

執筆者の良慶については不詳。檀那の宇多良光行についても不詳である。書写場所はこれまでの真乗寺・真勝寺・諏訪神社と異なり、美濃国氣良庄下保八幡宮や同所船渡観音寺、中保安養寺仏殿となっている【写真12】。氣良庄は、岐阜県郡上市明宝周辺にあった庄園で、領家・摂関家領を経て、室町幕府の御料所となるがこれらの神社については不詳である。執筆者・書写場所とも異なることや、安保氏の所領が氣良庄内に確認できないことから、この時期の書写は安保氏関係者以外によるものであろう。



【写真12】 第四一九卷奥書部分



【写真13】 第五九二卷奥書部分

(2) 書写目的について
次に、書写目的のある奥書について検討しておきたい。

【史料】

「大般若波羅密多經卷第五百九十二」

右書写之志者、偏上報四恩、下至于下界群類、結皆成仏之因、

丹治実行・泰実・実蓮

殊父母六親 行智・光泰・蓮忍・尊忍

觀惠・觀性・觀智

朝宗・朝員・了仙 昇都率天上、還引導沙弥実惠、

成就二世諸願、乃至法界衆生平等利益故也、

仍懇思之所願、敬白如件、

嘉曆第二孟夏中旬 於飛州益田郡萩原郷

中呂書寫、執筆沙弥実惠

大檀那歳三十八也

【史料】は第五九二卷「奥書」部分である。書写の目的は「偏上報四恩、下至于下界群類、結皆成仏之因、殊父母六親成就二世諸願、乃至法界衆生平等利益故也、」部分から、当時三八歳の実恵が引導して親族のために祈願していることがわかる。また実恵の親族として、太字部分の名前が挙げられている。同様の記載は、すべて嘉暦二年（一三二七）に集中しており、名前も史料に書かれた以外に実員・長谷部氏・法阿など若干の異動が巻数によって見られる。これらは、安保氏の系譜で確認される実光¹⁰⁾—実員—泰実—光泰の系統にその兄弟や妻方が加わったものとされる。では、なぜこの年に親族のために大般若經の祈願書写を行う必要があったのであろうか。考えられるのは、この

二年前の正中二年（一二三二）十二月六日に安保行員が播磨国須富庄北方半分を含む各所領を基員に譲与したことに起因していないだろうか。また、その後、倒幕に向けて不穏な動きをしていた醍醐天皇に対して鎌倉幕府は元弘元年（一二三二）に軍勢を上洛させるが、その中に安保氏一族が見えることや建武元年（一二三四）になると建武新政権が須富庄知行安堵の国宣を基員に要求していることからわかるように、末期を迎えた幕府と建武新政権の間で揺れる今後の一族の対応について不安を持った実恵が大般若経書写による一族繁栄祈願を発起したとは考えられまいか。いずれにせよ、今後の検討を待ちたい。

むすびにかえて

以上、祖師野八幡宮所蔵の大般若経奥書についての調査報告を行った。なお、なぜ安保氏が所領のない美濃国に納経を行ったかについては不詳であるが、最後の將軍守邦親王の祈願所であった真乗寺との関係が想起されることは想像に遠くないであろう。大般若経奥書は、その後の鎌倉幕府衰退と南北朝期に活躍する安保一族の動向をも信仰面

註

- (1) その成果は、『文書館紀要二五号』（埼玉県立文書館、二〇一二年）に同名のタイトルで報告した。
- (2) なお、本調査は昨年度に引き続き、二〇一二年度東京大学史料編纂所一般共同研究「埼玉県関連中世武蔵武士関係史料の調査・研究」（研究代表者 新井浩文）の一環として実施した。当日の筆者以外の調査者は、清水亮氏

（埼玉大学準教授・井上聡氏（東京大学史料編纂所助教・伊藤一美氏（逗子市文化財保護審議委員）の三名である。

- (3) 『岐阜県史』史料編古代・中世2（岐阜県、一九七二年）に、『新編埼玉県史』資料編9（埼玉県、一九八九年）に二四四頁。なお、奥書の全体については『金山町誌』（金山町、一九七五年）が六二頁掲載しており、本報告も『同書』を参考にした。

- (4) なお、調査にあたっては同社宮司の田口方一氏にお世話になった。また、当日、岐阜県博物館の特別展「飛騨・美濃の信仰と造形―古代・中世の遺産―」展に出陳中のため調査できなかった五帖については、十月一日に岐阜県博物館にて追加調査を実施した。対応された同館学芸員守屋靖裕氏に改めて感謝申し上げたい。

- (5) なお、前掲註(4)「特別展「飛騨・美濃の信仰と造形―古代・中世の遺産―」展図録」解説では、書写年代の終年を文和二年（一三五三）としている。

- (6) 『禅昌寺史』（一九九九年）二頁

- (7) (6)に同じ。二頁六頁

- (8) 赤須については、文永三年十二月十一日付「関東下知状」（『新編埼玉県史』資料編5（埼玉県、一九八二年）、七九号文書）に丹治氏の所領として、「武蔵国賀美郡長浜郷内赤洲村」と見える。

- (9) 『萩原町史』自然・先史古代・中世編（萩原町、二〇〇二年）二六八頁。

なお、この河岸段丘延長には、戦国時代に当地を支配した三木氏の居城桜洞城跡が所在する。

- (10) 『上里町史』資料編（上里町、一九九二年）三四一頁

【表】祖師野八幡宮所藏大般若經奥書調査結果一覧

No.	巻数	年月日	書写者	書写場所	岐阜県史	金山町誌	埼玉県史	今回調査分	備考
1	101	文保2(1318)5.20	執筆覚西	播州法花山	○	○	○		播磨国須富庄関係
2	103	建武4(1337)11.8	西助筆良慶		○	○		○	
3	104	文保2(1318)6.24	執筆覚西	播州法花山	○	○		○	播磨国須富庄関係
4	106	文保2(1318)9.10	執筆覚西	法花山中院	○	○		○	播磨国須富庄関係
5	107	文保2(1318)9.22	執筆覚西	法花山中院	○		○	○	播磨国須富庄関係
6	108	文保2(1318)9.30	執筆覚西	法花山中院	○				播磨国須富庄関係
7	109	文保2(1318)10.27	執筆覚西	法花山中院	○	○		△	播磨国須富庄関係
8	110	文保2(1318)11.9	執筆覚西	法花山中院	○	○			
9	151	建武5(1338)初.3			○	○		○	
10	170	建武5(1338)3.13	執筆阿者梨良慶			○			
11	177	建武5(1338)3.13	助筆阿者梨良慶		○		○	○	
12	201	建武5(1338)暮秋下旬	右筆回乘房		○	○		○	
13	217	建武5(1338)9.29				○		○	
14	221	文保2(1318)6.5			○	○		○	
15	226	元応2(1320).5.15	大法主沙弥実恵武州賀美郡赤須西光寺住侶金剛仏資	飛州益田郡中呂真乗寺	○	○		△	岐阜県史巻数未詳
16	227	建武5(1338)9.23			○	○		○	
17	231	文保2(1318)4.21				○			
18	235	文保2(1318)4.25			○	○			
19	237	文保2(1318)4.28			○	○		○	
20	239	文保2(1318)5.2			○	○			
21	241	年月日未詳	大旦那丹治実行				◎	○	
22	258	年月日未詳	大旦那丹治実行				◎	○	
23	260	文保3.(1319)5.15	大檀那丹治実行		○		◎	○	
24	260 (裏書)	元応2(1320)5.17	大法主沙弥実恵・執筆金資信慶	飛州益田郡中呂真乗寺				○	巻260の裏書
25	275	元応2(1320)3.15			○				本云建長七年八月六日の記載有り
26	292	元応2(1320).5.16	大法主沙弥実恵・執筆金資信慶	飛州益田郡中呂真乗寺	○	○		○	
27	294	元応2(1320).5.18	大法主沙弥実恵・執筆金資信慶	飛州益田郡中呂真乗寺	○	○	◎	○	
28	295	元応2(1320).5.19	大法主沙弥実恵・執筆金資信慶	飛州益田郡中呂真乗寺	○		○	○	
29	296	元応2(1320).5.20	大法主沙弥実恵・執筆金資信慶	飛州益田郡中呂真乗寺			○	○	奥裏に書写銘
30	297	元応2(1320).5.22	大法主沙弥実恵・執筆金資信慶	飛州益田郡中呂真乗寺	○	○	◎		
31	299	元応2(1320).5.24	大法主沙弥実恵・執筆金資信慶	飛州益田郡中呂真乗寺		○		○	
32	310	建武4(1338)霜.5	気良庄下保内島原住人南入道妙圓		○	○		○	
33	314	建武5(1338)9.29	大檀那平光行・勸進上人覚勝	濃州郡上郡気良庄下保船渡観音寺		○			
34	321	建武5(1338)5.29			○	○		○	
35	324	天正17(1589).6.24			○	○		○	
36	326	建武5(1338)6.17	助筆良慶		○	○		○	
37	339	建武5(1338)7.10	助筆良慶		○	○		○	
38	340	建武5(1338)7.25			○			○	
38	374	嘉暦3(1328)4.26			○	○		○	
39	376	元徳2.6.下旬	執筆多前		○			○	岐阜県史は年月日・書写者不詳
40	385	建武5(1338)9.中旬	勸進聖人覚勝		○	○		○	
41	386		右筆圓乗寺		○	○		○	
42	401	建武4(1338)卯.5	大願主宇多良光行	奉施入八幡宮御経也	○	○		○	
43	402	建武4(1338)卯.3	大旦那当保相原 執筆良慶		○	○		○	
44	407	建武4(1338)卯.11	大旦那宇多良光行		○	○		○	
45	410	建武4(1338)卯.13	大旦那宇多良光行	奉施入八幡宮御経也				○	
46	419	建武4(1338)卯.25	阿者梨良慶	美濃国郡上郡気良庄下保八幡宮施入経	○	○	○		阿者梨良慶 59歳

祖師野八幡宮所蔵大般若経奥書調査概報(新井)

No.	巻数	年月日	書写者	書写場所	岐阜県史	金山町誌	埼玉県史	今回調査分	備考
47	430	建武4(1338)5.5	大壇那	奉施人八幡宮御経也	○	○	○	○	
48	444	建武4(1338)5.15	阿者梨良慶		○	○		○	
49	460	建武4(1338)6.15	当保(氣良庄内下保)住人宇多良光行 執筆比丘道誼	美濃国郡上郡氣良庄下保八幡宮御経	○	○	○	○	
50	469	建武4(1338)7.4	執筆良慶		○	○		○	
51	470	建武4(1338)7.2			○	○			
52	480	建武4(1338)10.21			○	○			
53	500	建武4(1338)10.6			○	○		○	
54	502	元応2(1320).9.2	金資【梵字】	飛州益田郡中呂真乘寺	○	○		○	
55	505	元亨2(1322).12.11	金資信慶	飛騨国益田郡萩原郷中呂真乘寺	○	○		○	
56	509	元亨2(1322).7.4		飛州益田郡中呂真乘□(寺)	○	○	○		
57	517	元亨3(1323)11.15		飛州益田萩原真勝寺	○	○		△	
58	521	正中2(1325)8.5	圓実		○			○	
59	522	正中2(1325)8.13	圓実		○	○	○	○	
60	524	正中2(1325)8.28	圓実		○	○			
61	527	正中2(1325)9.中旬	圓実		○	○			
62	537	嘉暦元(1327)11.27	執筆散位		○	○		○	
63	538	嘉暦元(1327)12.7			○	○			
64	540		執筆性禪	飛州田舎郡				○	
65	552	嘉暦2(1327).9.8	執筆金資阿者梨信慶	飛騨国益田郡真勝寺護摩所	○	○		○	
66	561	建武5(1338)5.6	良慶		○	○			
67	571	嘉暦2(1327)初秋上旬	大檀那沙弥実恵		○		◎	○	奥書自筆、按文書あり
68	572	嘉暦2(1327)孟夏下旬	大檀那沙弥実恵		○	○	◎	○	奥書自筆、按文書あり
69	573	嘉暦2(1327)孟夏下旬	大檀那沙弥実恵			○	◎	○	奥書自筆
70	574	嘉暦2(1327)初秋上旬	大檀那沙弥実恵				◎	○	奥書自筆
71	575	嘉暦2(1327)7.21	大檀那沙弥実恵助筆金資信慶	飛騨国益田郡萩原新諏訪御拝殿	○	○	◎	○	奥書自筆
72	576	嘉暦2(1327)初秋上旬	大檀那沙弥実恵		○		◎	△	奥書自筆
73	579	嘉暦2(1327)7.21	助筆金剛仏子信慶	飛騨国益田郡萩原新諏訪御拝所	○	○	○	○	
74	580	後次年未詳					○	○	奥書人名巻600に同じ
75	581	嘉暦2(1327)孟夏中旬	大檀那沙弥実恵		○		◎	○	
76	583	嘉暦2(1327)孟夏下旬	大檀那沙弥実恵				◎		奥書自筆
77	584	嘉暦2(1327)孟夏下旬	大檀那沙弥実恵		○		◎	○	奥書自筆、按文書あり
78	585	嘉暦2(1327)孟夏下旬	大檀那沙弥実恵				◎	○	奥書自筆
79	586	嘉暦2(1327)孟夏下旬	大檀那沙弥実恵		○		◎	○	奥書自筆
80	587	嘉暦2(1327)孟夏下旬	大檀那沙弥実恵				◎	△	奥書自筆
81	588	嘉暦2(1327)孟夏下旬	大檀那沙弥実恵				◎	○	奥書自筆
82	589	後次年未詳	(大檀那沙弥実恵カ)				○		奥書人名巻590に同じ
83	590	嘉暦2(1327)孟夏下旬	大檀那沙弥実恵		○			○	奥書自筆
84	592	嘉暦2(1327)孟夏中旬	執筆沙弥実恵	飛州益田郡萩原郷中呂	○		◎	○	大檀那、歳38也
85	593	嘉暦2(1327)孟夏下旬	大檀那沙弥実恵		○	○		○	奥書自筆
86	594	嘉暦2(1327)孟夏中旬	大檀那沙弥実恵		○		◎	○	
87	596	嘉暦2(1327)孟夏中旬	大檀那沙弥実恵		○		○	○	奥書自筆
88	597	後次年未詳					○	○	
89	598	嘉暦2(1327)孟夏中旬	大檀那沙弥実恵		○	○	◎		奥書自筆
90	599	嘉暦2(1327)孟夏下旬	大檀那沙弥実恵		○	○	◎	○	奥書自筆
91	600	嘉暦2(1327)孟夏下旬	大檀那沙弥実恵		○	○	◎	○	奥書自筆
92	巻未詳	元応2(1320).5.15	大法主沙弥実恵・書写筆武州賀美郡赤須西光寺住僧金剛仏資	飛州益田郡中呂真乘寺	○		◎		
93	巻未詳	元応2(1320).5.17	執筆金資信恵	飛州益田郡中呂真乘寺	○	○		○	
94	巻未詳	嘉暦2(1327)孟夏上旬	大檀那沙弥実恵		○				
95	巻未詳	元徳2(1330).6.中旬			○				
96	巻未詳	建武4(1338)卯.24	大檀那宇多良光行		○				奉施人八幡宮御経也
97	巻未詳	文和2(1353).卯.3	執筆□□□		○			○	

○1988.8.2調査 ○2013.8.26調査
 ◎は県史掲載分 △2013.10.1岐阜県博にて調査